**2021年月一論文　書籍**

**湯浅誠　つながり続ける子ども食堂**

【要約】

　2012年に発足以来、5000以上の子ども食堂が日本に誕生した。新型コロナウイルスの影響を受けながらも、各地方では子ども食堂の運営に精を出す人がたくさんいる。人間関係が希薄になった現在の日本社会では、誰とも繋がれずに孤独を感じる子どもが増加している。両親が共働きの為、夜遅くまで留守番をしている子どもたちも多い。地域の人々のつながりが減少し問題視されている。この問題は子どもに関わらず、若者も親も高齢者も同じ問題を抱えている。人々との交流が減少し、特定の人との交流のみで暮らしている。このような時代だからこそ、子ども食堂は地域の人々の交流を生み出す場所として近年注目を集めている。地域住民の多世代交流拠点として子ども食堂が誕生し、地域の新たなコミュニティ作成を目指す。

【感想】

　子ども食堂と聞くと貧困というイメージを持つ。その払拭したいと心から思う一冊であった。子ども食堂が地域の中に一つでも存在することで、地域のコミュニティが作成できるということが分かった。子どもたちの居場所づくりだけにとどまらず、地域住民の居場所づくりを型にはまらずに行う必要性を感じた。